セピア色プラネット

行堂梦

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
セピア色プラネット

【Ｎコード】
Ｎ０３１０Ｕ

【作者名】
行堂梦

【あらすじ】
強力なウィルスに汚染された世界。何もかもが崩れ去っていくこの星の中で、私にとって貴方が最後の希望だった。
すべてがセピア色になってしまう前に、せめて愛する人に、会いたい。

《プロローグ》

「どうしてなの？」
俺の腕の中で彼女は囁いた。
「私はまだ…死……た…ない……」
最後まで言い終わるまえに、彼女は砂になって崩れ落ちた。

ごめんね、助けてあげられなくて…

ほんの一握り、彼女を瓶に詰める。
残りはすべて風にさらわれた。

キラキラひかる瓶にキスをする。
次は幸せな時代に産まれてくることを祈ってるよ。

This is planet of sepia.

I'm still alive...

Please call me back by some ways, if you can hear me.

《第一章　終焉》

第一章　終焉

私の研究室は、地下３０階。この建物の中で一番深くて安い部屋だ。
つまり、私は下の下っ端研究員だってこと。

引っ越してきたとき、これだけはと奮発して買ったダブルベッド以外は大体どの家具も安物。よく言えばシンプル、悪く言えば質素だ。
元々ファッションやインテリアには興味がなかったので私は気にならないが、彼の方はそうではない。
出張へ行く度にご当地のぬいぐるみを買ってくるので、ベッドまわりだけは華やかになっている。

そんな彼は、私の部屋にはもういない。

「もう一ヶ月も会ってないよ」
「ごめんね？」
画面の向こうで彼は寂しい顔をした。
「私は、貴方がどっか行っちゃってから一歩も地上へ出てない」
「……ごめんなさい、俺のせいだね」
そうだよ。貴方の分の仕事も、私がしなきゃいけないのよ？
だけど、今言いたいのはそんなことじゃなくてね。
『寂しいよ、早く帰ってきて』
そう、それだけなのに、素直に言えない。

「セツ……どこにいるの？」
「……ごめん」
それすらも言ってもらえないのが惨めだった。
私は、そっと画面に映る彼の頬に触れた。ケータイなんかじゃ温度は伝わらない。
浮かんでくる涙は、意地でも見せまいと目を伏せた。
喉につっかえてた本音が、口のなかですり変わる。
「もういいよ、もう…何にも言わなくていい。聞きたくない」
「……わかった」
ずきん、と心臓が痛んだ。
悲しい顔をしてるのはわかってる。だから、見たくない。

「電話、もう切って。忙しいんでしょ」
「……俺はアミィを愛してる。これは、本当だから」
「…切って！」
「泣かせてばかりでごめん」
わかってるなら、帰ってきてよ……。
「……じゃあね…」
そういって電話が切れた。
本当はもっと話していたいって、わかってるんでしょ？
私があまのじゃくなの、知ってるのに。

「理不尽だよね、そんなの」
その呟きが自分自身を突き刺した。

また、やってしまった。後悔がぐるぐる渦巻く。

机の上、山積みにされた研究資料を素通りして、無秩序なベットに倒れ込む。
この前まで、ここにセツは居たんだ。ぬいぐるみたちは変わらず微笑んでいる。けど、全然、足りないよ。

「急な仕事でしばらく帰れない」
セツはそういって出て行ったけど、嘘だ。
同僚も上司も、みんな彼の行き先を知らないと言っていた。

私にまで嘘ついて、何処に行ってるのよ。
三日に一回の電話だって、いつも背景は灰色の壁で、無音で、手がかりなんて一つもない。

「なんで……私、セツの彼女だよね？　なのに、何にも、知らないじゃない……っ」

やっぱり我慢できなくて涙が出た。
少し前まで貴方を抱きしめていたはずの両手が寂しくて、どうしようもなくて。貴方にもらった白いうさぎに縋った。
きつく抱きしめてみたが、涙は止まるばかりかどんどん溢れ出て来る。

すぐに、我慢するのを放棄した。
もういっそ泣いてしまった方がいい、誰も見ていないのだから。そう思った。一人きりなのに意地をはる必要はどこにもない。
そう思った途端、本当に止まらなくなって、私は声をあげて泣いた。

そして私は泣きつかれて眠ってしまった。

セツの事も、研究の事も、世界の事も。私は何も、本当に何も知らなかった。

次に目が覚めたとき、世界がどうなってるかなんて、考えもしなかった。

そして世界は終焉を迎えるの。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0310u/

セピア色プラネット

2012年1月8日22時52分発行